

— NO213 10月号

# FOREST NEWS

未来を育てる木を植える  
未来を守る木を植える



## 2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携



理事長メッセージ

## 植樹による生態系の回復と持続可能な社会の創造

エコロジー、つまり最も新しい学問である「生態学」とは何か。一言でいえば、「生命集団とそれを取りまく環境の総合科学」です。これは、宮脇昭博士（1928～2021）による定義です。

今、私たちが直面しているのは、①気候変動（地球温暖化）、②異常気象の激化と自然災害の頻発、③世界的な食糧危機、④生物多様性の喪失（種の絶滅）などの問題です。はたして、これらを人間の力で解決できるのでしょうか。この難問に答えを出し、学術書に著し、講演会で語り、自ら実践されたのが宮脇博士です。

博士は、これら4つの問題は互いに連鎖しているとし、産業革命以降の急速な都市化によって、地球上の森林の99%が失われたことが主要な原因であると結論づけました。つまり、かつて日本各地に存在していた“原始の森”に近い森を再現できれば、これらの問題はドミノ式に解決できるというのです。

さらに博士は、人口爆発による「大量生産・大量消費・大量廃棄」が、地球規模の環境汚染をもたらしたと指摘しています。

これらの科学的論拠をもとに、具体的なアクションとして「植樹による森の再生」を提唱し、いわゆる「宮脇方式」として知られる植樹ブームを日本をはじめ世界各地に巻き起こしました。その方法は実に簡単で、日本の場合でいえば、シイノキ、タブノキ、カシノキなどの常緑広葉樹のポット苗を混植・密植するというものです。このやり方で、場所さえ確保できれば、森を再現することが可能なのです。

当法人では、本来の豊かな生態系を取り戻すため、日本各地で手軽に親子でできる「どんぐり拾い」や本格的な「宮脇式植樹活動」を実施しています。読者の皆様も、ぜひ一度体験してみてください。



## 小仏峠 育樹祭に参加してきましたー

2025年9月27日（土）「高尾小仏育樹祭 2025秋」が開催されました。主催者のNPO 法人国際ふるさとの森づくり協会、植生工学士にボランティア、土地を所管されるNEXCO中日本の皆様をはじめ47名が集いました。当法人からは、男性2名、女性2名、計4名で参加、皆様と交流をしながら、爽やかな汗を流しました。



全体参加者

### 小仏峠植樹祭の経緯

高尾小仏植樹活動は、中央高速道路・小仏トンネルの工事残土によって形成された巨大な盛土場に、自然環境保全と防災の観点から「森」を再生する取り組みとして、2017年に始まりました。宮崎昭先生（横浜国大名誉教授）が提唱された潜在自然植生に基づく混植・密植方式を採用し、毎年植樹祭を開催。2023年秋の第7回植樹祭では、ついに盛土場の頂上部に到達しました。



植樹の様子（2017年）

小仏峠の植樹ボランティアは、トンネル掘削時に発生した莫大な量の土砂や岩石が谷あいには堆積された場所に対し、豪雨による土石流災害を未然に防ぐ目的でも活動しています。

これまでに植えた木は22,000本を超え、順調に生長しています。ただし、植樹後3年ほどは、雑草や蔓性植物から苗木を守るために定期的な育樹（除草）作業が必要です。また、鹿やイノシシによる獣害への対策も粘り強く続けてきました。

本年度は、蔓性植物の侵入が著しく、苗木の生長が阻害されたり枯死する例も見られるため、蔓性植物および外来種ニセアカシアの除去を中心に取り組んでいます。



当法人の参加者

### 小仏峠植樹祭参加者の感想です

宮脇方式の混植樹・密植樹で植えた木々は、4年ほどで5m前後に成長し、雑草やツル草もほとんどなく、すっきりとした様子を直に見て、宮脇方式の植樹の素晴らしさを再認識しました。植樹の大切さと必要性をもっとPRし、国民的運動へと発展させる必要があると感じました。

トンネルを造ればガレキや土砂は必ず出るのだから、それらへの対策を法律的に整備することが必要だと思います。育樹祭の参加者の皆さんがとても元気で、ハツラツとしていたことも印象的でした。植樹や育樹祭は、現代人のストレス解消や健康促進に最適だと思います。

今回は小川のせせらぎの中でコサギと出会えたことに感動しました。



# 地球幸福度指数1位コスタリカ、国を挙げた環境政策でサステナブルシティを目指す

## 環境政策が導く持続可能な幸福

北米大陸と南米大陸の間に位置し、東にカリブ海、西に太平洋を望み、国土の中央には背骨のように中央山脈が走るコスタリカ。GDPは世界76位と、経済的には決して豊かな国とは言えませんが、「地球幸福度指数」において、3回連続で第1位に輝いています。なぜ、コスタリカは世界でもっとも幸福度の高い国といわれるようになったのでしょうか。

そこには、政府主導の環境政策、平和を愛する国民性、そして豊かな自然と共存する人々の暮らしがありました。

## 地球の0.03%に、生命の5%が息づく国

コスタリカは、日本の四国と九州を合わせたほどの小さな国土に、海拔0mの平地から標高3000mの山地まで、多彩な地形が広がっています。

熱帯雨林気候、サバンナ気候、温暖湿潤気候などが混在する希有な土地柄で、世界全体のわずか0.03%の面積しかない国土に、地球上のすべての動植物種の約5%が生息しているのです。国土の約4分の1が国立公園や自然保護区で構成されており、自然を活かしたエコツーリズムが盛んです。



世界一美しい虹の鳥 ケツァール



自然保護区内の吊り橋



モンテベルデ自然保護区の入口

トルトゥゲーロ国立公園の運河

モルフォチョウ

## はげ山から緑の楽園へ森林再生の軌跡

コスタリカも、15世紀以降は牧畜や木材需要の増加に伴い、無計画な森林伐採が進みました。かつて森林に覆われていた国土は、次第に“はげ山”へと姿を変えていったのです。

環境破壊の実情を憂慮したコスタリカ政府は、1948年に軍隊を廃止し、軍事費を教育・医療・環境保全へと振り分けてきました。「兵士よりも教師を」という理念のもと、教育費はGDPの約8%に達し、平和教育や環境教育にも力を入れ、国民の意識向上にも努めてきました。こうした取り組みにより、コスタリカは世界に先駆けてサステナブルな社会を築いていったのです。

1980年代半ばから始まった施策の結果、森林面積は大きく回復。復活した生物多様性は世界中から観光客を呼び込み、エコツーリズムが発展しました。自然保護とともに富をもたらすサステナブルな基幹産業として、コスタリカの経済を支えています。当法人が目指す自然との共生共栄の道のヒントが、ここにあるように思います。